

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎗木町 198-3
電話 (043) 485-1801

鐘植さま----- 林 久子 風にそよぐムクロジの木----- 三田 俊郎
男子厨房に立つ----- 富田 栄 与太郎の短歌----- 藤田 恭

雑感 二題

松山 洋子

◆ アメリカオニアザミ

野草好きの T さんから嬉しい誘い。「馬渡へ行かないか」と。かねてから訪れてみたかった地域。彼の地に詳しい I さんも一緒だという。

市の文化遺産「下総まわらし宿百観音」にも、たくさんのお社にも、宿場を彷彿させる街道や家々のたたずまいにも大いに関心はあるのだが、今日の目的は植物観察。藪蚊を払い、流れる汗を拭きながら、百観音周辺の林内や道沿いの雑木林、そして水路や草むら等の植物を観察しながら歩を進める。

驚いたのはアメリカオニアザミ。農家の牛舎脇に草丈 1.5m もあるうかと思われる立派な株を見つけた。紫色の花はきれいだ、葉にも茎にも全体に鋭い棘を持つ。間違っただけなら、飛び上ら

んばかりの痛さである。草地に広がり、家畜に被害が出ているところもあるという。花後、タンポポのような綿毛になつて種子を飛ばし、分布を広げる。「特定外来生物法」の下、印旛沼のナガエツルノゲイトウやカミツキガメなどとともに、栽培、飼育、譲渡、配布等が厳しく禁止されている。そんな害草が馬渡にまで…。

アメリカオニアザミには驚いたが、初見の花に出会ったり、幾種類かの貴重種を確認したり、心躍る散策となった。佐倉の豊かな自然に感謝。

◆ 叶わぬ夢？

先々週から始まった祭りの準備。重機も繰り出してやぐらを組み、柱に紅白の布を巻く。テントを組み立て、町内のメイン通りと盆踊り会場に

たくさんの提灯を下げる。自治会最大のイベント夏祭りは、毎年自治会員の労力奉仕と協力体制の下に続いてきた。

地域の結束力も自治会の組織力も、私は心から誇りに思う。しかし、何か足りない。そう、若者の姿がないのだ。ここに中学生や高校生がいて、たとえば重たいものを運んだり、高い樹に登って提灯の綱を渡したりしてくれたらどんなに助かるだろう。進む高齢化を直視すればなおのこと、次代を担う若者を取り込んだまぢづくりが必要ではないか。現実には余りに厳しく、「平均年齢を 5 歳下げるのは容易ではない。そんなのは夢物語さ」と一蹴されそうだが。

些細なことでもよい。始めの一步が動き出すまじに出来ないだろうか。本当に叶わぬ夢なのだろうか。

(編集委員)

鍾馗さま

雛のまつりも終わるとその次は端午の節句。四月に入ると空高く鯉幟を目にするが、私の家は鍾馗さま。高さ五十センチ程の大きな鍾馗さまで長男が生まれた時に、里の両親が祝ってくれたものだ。三越の包紙だったので、浦和から新宿、そして京王線に乗って大きな包を持ってよく来られたと親の有難さを感じた。今なら宅急便で届けられるだろうか。親戚からもいくつか人形が届いて、金太郎、神武天皇など、後正面には家紋の入った幟。三段四段と緑の敷物の上に飾られた。

引越しをする度に、一つ二つと減って鍾馗さまだけが残って五十七年が過ぎた。子供が幼い頃は、悪い事をする、とあの鍾馗さまが見ているよ、とよく言ったものだが、その子供達も六十歳近くになり、あの頃の鍾馗さまの恐ろしさ

を、かすかでも覚えているだろうか。とてもよく出来た人形で、いかめしい顔と長い黒髪、そして背中に大太刀を背負って、空を睨んだ姿は、子供心にとても恐ろしいものはなかったらうか。

そして驚くのは、六十年近くたっているのに、着物の色褪せは少しもなく、毎年五月になると、我が家に立派な古い鍾馗さまが、飾られるのです。そして我が家の歴史をずっと見てきた鍾馗さま、来年もまた貴男に会えますね。

(稲荷台 林 久子)



風にそよぐ

ムクロジの木

私は、静かな田園風景が好きで、近所の田園付近を散策するのを楽しみにしています。

最近ムクロジという木の実をこすると石鹸のように泡立つと聞き、どれくらい泡立つのか、知りたがり屋の私は試してみました。

以前行ったことのある宝金剛寺にその木があったような気がして訪ねることにしました。

『佐倉細見』を見てみると、「宝金剛寺は大日如来を本尊とする真言宗の寺院で、鎌倉初期の建仁3年に將軍源頼家が北条時政を奉行に命じ創建させたと伝えられています」とあり、由緒正しいお寺だとわかりました。

11月中旬になっていましたが、もしかするとその実を見る事が出来るかと思いい、カメラ片手に出発しました。

当日は小春日和の穏やかな天気でした。お寺は新築されてまもなく、美しい姿をしていました。境内にいた子供づれの女性に木のことを尋ねると、お寺の方を呼びましようと言ってくれました。

お寺の上品な婦人が出てこられて、目的のムクロジが境内に大きく聳え立っている事を教えてくれました。目的の実は落ちた後で試すことは出来なかったけれど、実の中に入っていた真つ黒い種を2粒拾ってくれました。昔はこの種を数珠や、正月に遊んだ羽根突きの羽を止める玉にしたこと、外側の実をこすると泡立つことなどを教えてくださいました。

私は親切に話していただいたことを謝しました。改めて静かな境内を見回すと、山を背にして田圃が広がりムクロジの木が、ゆっくりと風にそよぐ姿にしばし時を忘れ、心豊かな時間を過ごしました。

(城 三田 俊郎)

男子厨房に立つ

ある日の市民カレッジに大根の漬物を持参し、同級の奥様たちに試食願った。クラス一番のお喋りでどことなくチャーミングな奥さんから「貴方の奥さんはよく気が付くし、しかもいい味に出来ている」との過大なるホメ言葉を頂き、これには自分が作ったとは言ひ出せず。

私は暇になった数年前から厨房に立つようになった。子供の頃は夏休みに川で取ったウナギなどを料理し、我が家の食卓に供していたことがあり料理は苦にならない。当時、田舎の男の子はほとんど遊びを兼ねて鮎、どじょう、鯰などの魚取りをしていたものだ。さて、グラスを片手に料理するのが私流、後かたづけは妻の仕事だ。天ぶらを揚げるときは飲酒と摘まみ食いとで、夕食が出来上がる前に私が出来上がる。天ぶらはなかなか

カラツとしたサクサク感が出せず苦戦している。お手軽なのはカレーにシチュー、その他の料理も一応できるが何れも今一であった。

昨年、料理のレベルアップを願って、しづ市民大学の「おやじの食事学コース」に入學し修行を重ねた。中高年の男性三十人が包丁片手にワイワイしゃべりながら料理を作るのは楽しいもの。さらに独身で清楚な若い女性職員が笑顔でリードしてくれるのがまた楽しい。冒頭の漬物は授業で習った復習作。

主婦の食事作りは年に千回位、改めて大変だと思う。何時も何も言わずに黙ったまま食わしてもらっているが、たまには美味しかったと妻に声をかけてやりましょうかナ。毎日厨房に立たなくてもよい様、妻の長生きを神様、仏様にお願ひしましょうかネ。

(上志津 富田 栄)

与太郎の短歌

久々に 満員電車に吐き出され

固形の体

春風にほぐし

夏トンボ 居間に入りて

三周し

吾のバテ顔

見て帰りけり

鳴く蟬の ハモる合唱

聴き居りて

思わず吹き出す

絶妙和音

一、二匹 小うるさい蚊に

腹吸わせ

思いつき叩けど

まんまと逃げられ

野良猫に 声を掛けれど

シカトされ

知り合いなのに

もう秋の空

山鳩の 遠く聞こゆる

野太声

春呼ぶ歌なら

吾も謳おう

青瓜の ツルが手を伸べ

朝顔の

添木に巻き付き

ねんごろとなり

オニヤンマ 吾を追い抜き

先行けど

迎えに戻る

情の嬉しき

蝶の羽根 一心に運ぶ

蟻二匹

行く手を阻む

落ち葉除けやり

紅を差し カールをかけて

お洒落して

彼岸を迎えし

曼珠沙華

(鑄木町 藤田 恭)

10月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更、句読点等の修正や語句の訂正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鏑木町198-3

URL <http://www.city.sakura.lg.jp/kominkan/cyuuou/index.htm>

さくら道

自宅の前に大きな調整池がある。数年前から池の中央付近の汚泥に葦が生えてきた。そのおかげで多くの野鳥が飛来し、散歩中の人が足を止めて見つめるようになった。ツバメ、メジロ、ウグイスに加え、コガモ、コサギ、アオサギ、カワセミなどの水辺の鳥が飛び交う。けたたましい声でヨシキリが間断なく鳴く。

この素晴らしい鳥たちを窓

辺から一望できるのが拙宅の自慢である。ヒヨドリを手乗りにするほど鳥好きの妻は、一日中双眼鏡と野鳥図鑑を手もとから放さない。
佐倉には自然が残されているといってもこんな住宅街で鳥たちの声で目を覚まし、コーヒー片手にカルガモの親子の行進が楽しめるとは。夏の暑さを忘れさせてくれるなんとも避暑地的な爽やかさが、ここ下総佐倉の地にはある。

(田村 孝則)

あとがき

市民カレッジに入学して4ヶ月余り。『なかま』の編集に携わることになり、たくさんの方々の原稿を読ませて頂いています。内容は実に多様で、感心させられたり、興味をそそられて真似をしてみたいと思ったり、編集そっこのけで楽しんでいきます。

今月号は、端午の節句には鯉幟ではなく「鐘馗さま」を飾ったという林さん、「ムク

ロジ」の木の実が気になっていたりという三田さん、料理好きが高じてしづ市民大学で修行を重ねたという富田さん、三人のお話と、季節感に溢れつつクスツと笑える藤田さんの与太郎の短歌を紹介させて頂きました。

秋の夜長、懐かしい思い出や身近な出来事などを文に認めてみませんか。そして投稿して頂ければ幸いです。

(猪俣 民子)